

黒神と忌み子のはつ恋  
虐げられた無能の娘は、孤高の神に愛される

遠野まさみ Toono Masami



アルファボリス文庫

## 第一章

バシャツと大きな音がして、バケツの水が廊下を水浸しにした。

はつとして香月が顔を上げると、そこには妹の桔梗が花のかんばせを歪めて不機嫌そうな顔で立っている。

「あゝあ、こんな邪魔なところに置いておくから、躓いてしまったわ。着物の裾も濡れてしまったじゃない」

広い廊下の拭き掃除をしていた香月は、バケツもその身もきちんと家人の迷惑にならないようにしていたはずだった。

しかし、桔梗がそう言うのだから、バケツは彼女の邪魔になるところにあったのだろう。

「も、申し訳ありません……」

廊下に跪き、額をその板にこすりつけて謝罪する。

視線をちらと上げれば、桔梗の言うとおり、若草色が鮮やかな菖蒲文様の着物の裾が濡れていた。香月は手に持っていた雑巾をバケツに置き、帯に挟んでいた手ぬぐい

を引き抜いて、彼女のもとに駆け寄る。

「今、お拭きいたします」

香月が手ぬぐいで濡れた着物の裾を拭こうとすると、桔梗はすかさず身を翻した。捌いた足が香月の腹に当たると。足が当たった腹は、横から蹴られたに等しい衝撃を覚えて息が詰まったが、なんとか耐えた。

桔梗は大きく丸い瞳を嫌悪につりあげて、汚いものを見たように着物の袖でそのふっくらとした口許を隠す。

痛みを堪えたあとに息を抜き俯くと、ぱさぱさで艶のない髪の毛が肩からぱさりと一房落ちた。

水たまりができた廊下を見れば、自分の荒れた指先が視界に入る。姉妹だというのは、香月と桔梗には容姿に歴然とした差があった。

誰もが振り向く白磁の肌に愛らしい大きな瞳。長く豊かな黒髪はまっすぐ艶やかで、唇の朱という丹精込めて作りあげられた人形のようなのだ。

そんな美貌の桔梗に対して、香月はあまりにもみすばらしい。艶のない髪や荒れた手先はもちろん、頬に肉もつかず、そこに赤みが差すこともない。

忙しきで何かを考える余裕などない香月は、言いつけられたことをこなすだけの棒人形のように目がうつろだ。もちろん口の端が笑みに引きあがることなく、乾い

た唇が謝罪を述べるときにのみ、動くだけ。

着ているものも袖口や裾のすり切れた緋で、普通の使用人だってもう少し雇い主の身分を考えて身なりを整えるだろうにというほどだ。

そんな香月に、侮蔑の感情がこもった言葉を桔梗は投げかける。

「やめてくださいな、お姉さま。お姉さまの手ぬぐいなんかで拭いたら、余計に汚くなってしまうわ。それより早く片付けて。もうすぐ浩次朗さまが迎えに来てくださるのだから、蓮平のみつともないところを見せないで」

「は、はい。今すぐ……」

浩次朗とは桔梗の婚約者だ。

この国にはびこる異形・妖魔から人々を守る破妖五家の一門・桐谷伯爵の次男で、帝にも重んじられている遣い手だと聞く。

五家には、桐谷、櫻門、松坂、橘月、蓮平と五つの系譜があり、香月の蓮平家もその一つに当たる。

本来なら香月も破妖の力を持ち、妖魔を駆逐するために奔走すべき存在だ。しかし「お姉さまは破妖のお仕事ができない無能なのだから、お掃除くらいはきちんとこなしてください」と

蔑むように桔梗が見下ろす。香月は、申し訳ありません、と言うしかない。

そう。香月は破妖の家系に生まれながら、破妖の才がなかった。それどころか。「ああ。でもまあ、黒の血をお持ちだなんて妖魔でしかないのだから、破妖のお仕事ができるわけがなかったですわね」

ころころと鈴を転がすような声で笑う桔梗に、ぐっと奥歯を噛む。香月はその言葉の前にもう何度も項垂れてきた。

黒の血。黒は夜闇の黒。妖魔の黒。

普通の人とは異なる黒の血が、香月の身の内には流れている。その血は妖魔に好まれるため、家族からも街の人たちからも忌避されてきた。

「忌み子なのに命があることを、お父さまとお母さまに感謝しなくてはいいけませんわね。ねえ、お姉さま？」

「……は、い……」

幼い頃、香月が怪我をした際に妖魔が家になだれ込んだ。

そのときの両親の怒りは激しいものだった。破妖の家に生まれながら、とか、蓮平の汚点だ、とか、とにかくひどく罵られ、折檻された。

（あのときは、私が怪我をしたばかりに、家の中がめちゃくちゃになった……）

当時の記憶は、今も鮮明に脳裏に思い浮かべることができる。

突然現れた妖魔に驚き、逃げ惑う家の使用人たち。突如の襲来に応戦一方になった

父や母。家の中はめちゃくちゃに荒らされ、怪我人が出なかったのは奇跡的だった。そのくらい、父と母は香月の失敗の尻拭いを必死で行った。

そんな中、震えて立ち竦むしかできなかった自分を、香月は呪っている。

（私は、本当に何もできない無能者だわ……）

そんなことがあったから、その後、両親は香月に自ら血を流すことを徹底的に禁じた。血を流そうものなら着物の上から激しく殴られる。

しつけと称した皮膚を傷つけない暴力の数々は、香月から抵抗という力を一切奪った。

香月も家が荒れ果てた光景を目の当たりにしたから、自分は厄災の子なのだと、すぐに理解した。

だから両親に反抗しようなどとは微塵も思わなくなったし、ましてや蓮平の敷地から出て、街に逃げようとも考えなかった。何かの拍子に怪我をして、妖魔を引き寄せれば大変な惨事になることは、あの時の記憶で理解していたからだ。

（私は、いるだけで人さまに迷惑をかけるの……）

そういうわけで、昔は屋敷の北東にある不吉な牢に一日中閉じ込められていた。牢にいてもいろいろな理由でしつけは続き、それは香月の命が尽きるまで続くのだと思っていた。命を終えるのはこの牢の中であり、外の風景を見ることは一生叶わな

いのだと諦めていた。

しかし香月に抵抗の意思がないと分かると、家族は娘を下働きに使い始める。妖魔の襲来で恐怖に陥った使用人のほとんどが辞めてしまったので、それを補う者として、彼女が働けなかったのだ。

破妖の仕事ができない香月は、言われたことを遂行するしか生きる道がなく、今もこうして使用人のように働いている。

「さあ〜って、着替えなくっちゃ。今日も浩次朗さまに褒めていただかなくてはいけないもの。ふふ、私と違って、お姉さまはその、ぼろぼろの絆がお似合いだわ。着替える必要のない人はどんな身なりでも気軽でいいですね」

うきうきとした様子で、ひととおり香月にいやみを言い終えた桔梗が屋敷の奥に戻ろうとすると、騒ぎを聞きつけてきたのか、母親が廊下の角から顔を出した。

「どうしたの？ 桔梗……、って、まあ！ 廊下が水浸しに！」

「お母さま、そうなのですか。お姉さまが私のお着物を濡らしてしまったんです。このお着物、お父さまに買っていたいてとても気に入っていたのに、ひどいですわ」  
現れた母親に桔梗が着物の裾を見せると、彼女はまなじりを鋭くしてこちらを見、すかさず手を振りあげて香月の頬を張った。

「……」

パン！ と高い音が廊下に響く。反動で香月の細い体はその場にドオと倒れた。

「桔梗になんてことするんです！ それにもうすぐ桐谷さまがいらっしゃるといのに、この水浸しの廊下！ 無能者は掃除もまともにできないのですか！」

「も、申し訳ありません……」

「ささほど昨夜の狩り残しの妖魔がいるようだと報告が入りました。お前がきちんと妖魔を引き寄せなかったからですよ！」

彼女は怒鳴り声と同時に、今度は土下座していた香月を蹴り倒した。

足蹴りされ、みぞおちにつま先が食い込む。床に倒れ伏したまま、ごほごほと咳き込むが、香月はそれでも身を起こした。

目の前に立つ母親に向かって、額を床にこすりつけるように再び土下座する。

「申し訳、ございません……」

途切れながら紡がれた謝罪に、しかし母親は怒りを収めない。それどころか、香月が言葉を発したことにより、ますます苛立ちを露わにした。

「本当にすまないと思っているなら、なぜ、こんなことが起こらないようにできないの！」

今度は頭をこすりつけて土下座した香月の額めがけて、つま先が飛ぶ。

鈍い音が生じ、もう一度ドオと横倒しになった。

蹴られた額がずきずきと痛み、思わずぐもった声が出るが、被害者ぶらないでちょうだい！」と彼女は苛立ちを隠さない。

でも、それも仕方ないのだ。仕事のできない者に、存在価値はないのだから。

「お前のその黒の血は、妖魔をおびき寄せることにしか、使えないのですからね！」怒声が屋敷に響く。

腹を痛めて香月を生んだ母親は、黒の血を持つ娘を蛇蝎のごとく嫌っている。彼女の存在は破妖五家夫人の中から己の地位を転落させた、憎んであまりある存在なのだ。（私なんて、生まれてこなければ、お母さまは幸せだった……）

幾度となく悔いた、己の命。

ただひとつ、利用価値があると言えば、この血をもって妖魔をおびき寄せることだけ。

だから毎夜、妖魔が街にはびこる時間に、香月は家族が妖魔を狩るための獲物の餌となつて、街を疾走するのだ。

このときばかりは昼間の鬱憤を晴らすかのように、家族みんなが容赦なく香月を傷つける。

昼間、不用意に彼女に血を流させれば、たちまち妖魔が寄つてきて街が混乱に陥ってしまうが、夜なら好都合だからだ。

しかし、母親の言うように狩り残しがあつたのなら、それはゆゆしき事態だ。今夜は大切な神事のある夜で、その前夜に狩り残しなど、あつてはならなかった。

狩り残しのせいで、今夜は家族がよりいっそう忙しくなることが想像できる。己に課せられた最低限のことすらも果たせないのかと、自分のふがいなさにさらに項垂れるしかない。香月は声を小さくして返事をした。

「もちろん、分かっております……」

だが、大人しくうづくまっているだけの彼女すらも、母親の気に障るようだ。横倒しになったままの香月の腹を、さらにもう一度、蹴った。

「今夜こそは一匹残らず引き寄せるのよ！」

鬼の形相で言う母親に、黙ったまま首肯する。

いくらか怒りが収まった彼女の隣で、桔梗が大きく嘆息した。

「私よりも二歳も年上なのにお役目を果たしきれないなんて、蓮平の一員として恥ずかしいの？ お姉さま」

桔梗は呆れた目つきで香月を見る。

「お姉さまの失敗が広まったら、私が浩次朗さまに合わせる顔がなくなるのよ」憤慨する彼女に、母親も同調する。

「せっかく桔梗の実力を認められて桐谷さまとご縁が結べるというのに、この無能は

本当にあなたの足手まといにしかならないわね。大丈夫よ、お母さまがお父さまに頼んで、昨夜の不始末はなんとかしてもらうから。あなたは何も心配しなくていいわ」自分の頭を撫で、やさしく語りかける母親に、桔梗もにこりと微笑んで返す。「これから浩次朗さまとのデェトですのに、私に憂い<sup>うれ</sup>があつてはあの方がご心配されるところでした。やっぱりお母さまとお父さまは頼りになるわ」

「当たり前よ、大事な娘のためですもの。今日は活劇を見に連れて行っていただくと言っていたわね」

母親の言葉に、桔梗は口許をきゅっと上げて頬を染めた。

妹が浩次朗を好いていることは、彼女の今までの言動からも分かっていたし、その結婚の妨げになるような出来事を、彼女や母が許さない理由も心得ている。

「そうなんです、お母さま。浩次朗さまは、いつも私の願いを叶えてくださって、本当に素晴らしい紳士<sup>しんし</sup>ですわ。だからお姉さま、くれぐれも私の結婚の足を引っ張るようなことは、なさらないでね。この結婚について何も理解できないお姉さまには、その価値が分からないのも当然かもしれませんけど」

くすりと、蔑んだままの目つきで桔梗が笑う。

彼女が生まれるまで、蓮平家は落ち目で、与えられた爵位をギリギリのところで守ってきた。そんな中生まれた桔梗は稀代<sup>きたい</sup>の遣い手となり、父や母の希望の星と

なった。

桐谷と縁を結べることを、桔梗自身は言わずもがな、両親は大いに喜んだ。

桔梗と浩次朗の結婚は、蓮平が桐谷と親戚筋になるというだけではなく、勲功華<sup>くんこう</sup>やかな桐谷から蓮平に莫大な金銭、その他の援助が入るということだった。

そのことを、代々受け継いできた富を贅沢に使っている父や母が喜ばないはずがなかった。

両親にそんな喜びを与えることは香月では到底無理で、だから妹に、はい、と力なく応えるのが精一杯だ。

「じゃあ、私は着替えてきますけど、浩次朗さまがいらっしゃるまでにはそこを綺麗にしてしまってくださいね、お姉さま」

見下したままの桔梗が続ける。

「それにしても、玄関近くの廊下を濡らして私の着物までも汚すなんて、本当に私に對する嫌がらせでしかないんですよ。もし浩次朗さまにこの水浸しの廊下を見られたら、お父さまに叱っていただくわ。お母さま、いいでしょう？」

「もちろんよ、桔梗。桐谷さまにこんな不始末を見られたら、我が家の恥ですからね。あなたの幸せの邪魔はさせませんよ」

香月に向ける眼差しとはまったく違うそれを桔梗に向ける母親は、もう、ちらとも



こちらを見ない。

「ありがとう、お母さま。じゃあ、着替えるお着物はお母さまが選んでくださる？  
このお着物が今日はいつとう着たかったのに、濡れてしまったから、代わりを決めなければいけないの」

「いいわよ、手伝うわ。お母さまが髪の毛も結いなおしてあげる。行きましよう、お時間に遅れてはいけないわ」

娘を促して廊下の奥へ消えていく母親と、甘えたように、はあい、と返事をする桔梗の声が聞こえなくなったとき、香月は重たい息を吐き出した。

両親からもらえる愛情や、彼らに甘えることを許されている桔梗を羨ましく思う自分がある。

この身に黒の血が流れる限り、それは与えられなくて当たり前なのだと諦める。しかしあとして愛情あふれる親子の姿を彼女たちの様子で見えしまうと、同じ血を分けたいやうだいでありながら、自分の無価値さに泣きたくなる。

荒れた手をぐっと握りしめて、涙は堪えるけれど。

（仕方ないのよ……。桔梗の言うとおり、生かしてもらってただけありがたいのだから……）

だったらせめて、母や桔梗の指摘どおり、与えられた仕事を全うしよう。

香月は手ぬぐいを帯にかけなおし、バケツに置いていた雑巾を取ると、ぼろぼろの雑巾を握りなおして、大きな水たまりになってしまった廊下を拭おうとした。そのとき。

「ごめんください」

玄関の方から引き戸を引く音と、来訪客の声が聞こえた。はつと顔を上げ、応対に出る。

「ご訪問に気づかず、失礼いたしました。……ええと……」

訪問客は、青年だった。

明るい栗色のくせ毛に丸眼鏡の奥でやさしく微笑む瞳。濃紺の三つ揃いの洋装がよく似合っている。きつと普段から洋装に親しんでいるのだろうと思わせる佇まいだった。

青年は応対に出た香月が自分を認めて口ごもったのを見て、桐谷浩次朗と申しまず、と会釈をし自己紹介をした。

（この方が、桐谷さま……）

香月は下働きの身なので、訪問客にみすばらしい姿を見せることを禁じられている。蓮平の品位を下げると言って、家族の誰もが香月を他人に会わせたがらない。

香月もそれが当たり前だと思っていたから、もちろん桔梗の婚約者である桐谷浩次



朗の顔も知らなかった。

浩次朗は柔和な顔つきに違<sup>な</sup>がらず、香月に会釈をしたばかりか、蓮平に奉公の方ですか、と丁寧<sup>な</sup>に尋ねてきた。

「あつ、申し訳ございません。桔梗さまは今、お支度をしていらつしゃいます。上つてお待ちになれますか……？」

浩次朗を先導しようと、香月が廊下の奥を指し示すと、彼は首を横に振った。

「いいや、僕が早く来すぎてしまったのがいけないので、ここで待ちますよ。……おや？ 廊下が水浸しじゃないですか」

首を振ったときに香月の後ろが見えたのだろう、まだ拭いていなかった廊下を見られてしまい、香月は二重に蒼白した。

「も……、申し訳ございません。掃除の最中でして、お見苦しいところをお見せいたしました……。すぐに片付けますので、お氣になさらず……」

香月は深く頭を下げ、雑巾を握りなおそうとした。

そのとき、浩次朗がさつと上り框<sup>がまち</sup>にあがり、香月の細い腕を捉えた。

掃除もまともにできないのですか、と母に折檻された過去が脳裏をよぎり、身を固くする。しかし浩次朗は香月の思いも寄らないことを言った。

「水をこぼされましたか。お嬢さん、僕が手伝いましょう。早く拭き取らないと廊下

が傷<sup>いた</sup>んでしまつて大変だ。それに、その荒れた手で水を触るのは痛いでしょうし、君より腕の長い僕が拭いた方が、早そうだ」

彼はやさしげな表情を浮かべると、香月が持っていた雑巾をさつと奪つてしまう。

そして水浸しの廊下に膝をつくと、腕まくりをしてさつと大きな水たまりを拭つていく。

「あ……、あの……」

浩次朗の行動に戸惑っていると、彼は大丈夫ですよ、と微笑んだ。

「おうちの方には言いませんから、安心してください。それに、別にこの水たまりを片付けるのがお嬢さんじゃなくてはいけない理由はないでしょう？」

浩次朗の言い分を、ぼかんとして香月は受け止める。今まで香月の仕事を手伝おうなどと言ひ出す人に、出会ったことなどない。

ましてや荒れた手を痛いだろうといたわったり、香月のことを、お嬢さん、だなどと呼ぶ人がいるとは思わなかった。この人はきつと、素晴らしい教育を受けてきた人格者なのだろう。

初めての出来事におろおろしながら、彼の行動を眺めてしまう。

「あの……、あ、ありがとうございます……」

そして、ようやく発することができたのは、なんとも慣れない謝意だった。

香月の口から出る言葉と言ったら謝罪ばかりで、感謝を表すことなど、物心がついてから初めてかもしれない。

深々と頭を下げて、彼の行いに礼を伝えると、たいしたことではないですよ、と浩次朗は朗らかに笑った。そしてふと気づいたように問う。

「そういえば、蓮平の奉公の人にお会いしたのは、初めてだな……。奉公人はお嬢さんひとりですか？」

「あ……、え、ええと……、今はみんな休憩で……」

答えるのが難しい質問に、言葉を濁しながらなんとか応じる。

奉公人ではないのだが、実子である自分が使用人をしていてと他人に知られたら外聞が悪いだろうということは、学のない香月でも想像に難くない。

使用人は他にもいるが、炊事以外は香月ひとりで行っている。浩次朗の話に合わせてるように返事をする、彼は、それは大変だ、と驚いた。

「この大きな家の雑事をひとりではお辛いでしょう。仕事で何か困ったことはありますか？ あれば僕が婿入りしたら、改善しましょう。桔梗さんたちが不自由ないようにしたいですしね。とりあえず、使用人を増やすことはしましょう。お嬢さんもきつと楽になるはずだ」

困りごとを尋ねてくれるなんて……、と香月は目をぱちくりさせた。

使用人にすら心を配る浩次朗のことを、驚きをもって見つめてしまう。そんな気持ちを、香月は体験したことがなかった。

浩次朗の言動に何度か驚いていると、しかし心にふつと陰が差す。

（でも、この方だって、私が黒の血を持っていると知ったら、こんな風に親切になんてしてくださらないわ……）

浩次朗も五家の一員だから、香月の黒の血のことを知ったらこんな風に接してくれないだろう。

きつと両親や桔梗のように嫌悪や敵意の目を向けられるに決まっている。いや、もしかすると帝の覚えめでたい桐谷伯爵の子息なら、問答無用で殺されるかもしれない。

（黒は五家にとって敵だもの……）

自分はあなたに親切にしてもらえる人間ではないのだと言いたくても、言えない。

家族に忌み嫌われてなお、自分の命を手放したくないというささやかな思いが、香月にはある。しかし。

（黙っていると、この方を騙していることになるんだわ……）

その罪悪感で胸が潰れそうになる。こんな好青年に事実を偽らなければならぬ良心の呵責と、香月は戦った。

そんな彼女の心を知らずに、浩次朗は水たまりを拭う手を止めて、玄関の外を振り

向いた。引き戸の硝子からは陽光が差し込んでおり、三和土にきらきらとした光を落としていた。

「今日はよく晴れていて気持ちのいい日だから、外を歩くのは楽しいですよね」

黙ったままの香月を氣にしたのか、話題を切り替えるように浩次朗はそう言った。しかし香月は、その楽しさを共有することができず、もう一度ぎこちなく頷いて黙るしかない。

外の風景を想像したのか、浩次朗は視線を戻し、今度は桔梗を心待ちにするように廊下の奥に視線をやった。

「桔梗さんとこんな日に街を歩くと、もつと楽しいんですよ。空の日差しも、二割増しで輝いているみたいに思えるんです。不思議でしょう？ でも、本当なんです」

風景が誰かといふことで変わって見えるなんて、香月には想像ができない。

視線の先で、浩次朗は目を細めた。

「柳の並木道を歩いていると、何人もの男性がこちらを振り向くんですよ。桔梗さんは綺麗な人だから」

いつものデエトを思い出しているのか、浩次朗が嬉しそうにそう言った。桔梗が好んでいるのが分かる、そんな微笑みだ。

気持ちに素直でいられる彼の様子が、香月にはまぶしく映る。

「桔梗さんはいつもお連れするところを喜んでくれて、僕も誘い甲斐があるんです。やはり相手のためにしたことをその人に喜んでもらえたら、嬉しいですよ」

浩次朗はにこりと再び微笑んだ。しかし、香月はそれにも応えられない。そんな経験

を持っていないからだ。黙ったままの香月をどう思ったのか、浩次朗はさらに話しかけてくる。

「お嬢さんもそうでしょう？ 暇のときに友達とお茶をしたり、恋人と出かけたり、

そういう経験おありですよ」

「そ……、うです、ね……」

はにかんだ笑みを浮かべながら今度こそ同意を求める浩次朗に、香月はぎこちない笑顔を貼りつけて無理矢理答えた。

彼女にとつて、誰かのための行為をその人に喜んでもらうなど、闇夜に遠く輝く月の光のように手に届かないものだからだ。

浩次朗が話す晴れた日の柳の並木道だって、香月は見たことがない。自分の知っている風景といえば家の塀に囲まれた小さな世界と、闇に包まれ妖魔に追いかけられる恐怖の世界だけ。

見知らぬ誰かとすれ違うなどという経験も、もちろんしたことがない。ましてや異性に好意を持って振り向いてもらうなどということは、香月の人生ではありえな

かった。

自分は生きているだけで家族の苛立ちの原因になっている。己の存在が喜ばれるなどということは、考えられない。

(でも、もし)

しかし、浩次朗の言葉にふと夢想する。

もしも自分が桔梗のようになれたら……、誰かの喜びの源になれたなら、どんなに幸せな時間を送れるだろうか。

桔梗のように綺麗な着物を着て。桔梗のように昼の日の中、外へ出る。

桔梗のように学校で学び、友人と語らい、桔梗のように恋う人と好きな場所へ行く。自由を謳歌し、何より誰からも愛されて……。

ふ……、と視線が遠いところで焦点を結ぶ。

しかしそこに思い描くべき家の外の風景も、日のある並木道も、楽しい学校も仲のよい友人も、何より自分を愛する人の顔も何も思い描けず、香月は再び顔を俯けた。所詮、思うだけむなしい夢想だった。

(この家で、生かしてもらってるだけありがたいのよ……。黒の血を忘まれて殺されていても、文句は言えないの……)

生きる意欲も湧かぬ瞳にはなんの感情も浮かばない。水たまりを拭き終わった浩次

朗がそれに気づき、廊下にしゃがんだまま問いかけた。

「……僕は何か、悪いことを言ってしまったか……?」

心配そうに香月の顔を覗き込む浩次朗に、いいえ、と即座に答えるべきだった。しかし思い描くことのできなかつた幸せの残像が、判断を鈍らせる。

幸福を知っている浩次朗と、想像すらできない自分との間に決定的な差を見てしまい、彼の邪気のない視線すら、惨めさを刺激した。

「あ、……い、……」

いいえ。そう言おうとしたとき、廊下の奥から声が響いた。

「浩次朗さま、いらつしゃっていたのですか!」

「桐谷さま……、まあ、なんてことでしょう! その娘が何かしでかしましたか!」

廊下の奥から出てきたのは母親と、それから白の大きな薔薇が描かれた紫色の着物に着替えた桔梗だった。大きな薔薇柄は昨今の流行りの柄で、華やかな彼女の相貌によく映える。

「やあ、桔梗さん。時間前に着いてしまつて、すみませんでした。ところで僕がお贈りした着物をまた着てもらえて、嬉しいですよ」

微笑む浩次朗に、桔梗は慌てて笑みを浮かべた。

「とんでもございませんわ! お時間より早く、浩次朗さまにお会いできるなんて嬉

しいです。このお着物は以前着させていただったので、今日は違うものにしようかと思っていたんですけど、やっぱり浩次朗さまにお会いするならこちらが着たくて……。でも、なぜ浩次朗さまがお掃除のお手伝いをしてらっしゃるのですか？」  
うっとりとした浩次朗を見つめる瞳に、一瞬香月に対する厳しさがにじむ。

桔梗に問われ、彼は、ああいや、と苦笑いした。

「こちらのお嬢さんが、大きな水たまりを前に困っていらつしゃったので……。ああ、勘違いなさらないでください。僕が、勝手に雑巾を奪ってしまったんです。このお嬢さんは悪くないですよ」

「浩次朗さまが悪いだなんて、もちろん思っておりませんわ！ 悪いのはお掃除をすぐに片付けなかったこの使用人ですもの。なんて働けないんでしょう！」

「桔梗の言うとおりですわ。本当にこの娘の働かなさったら！ ご迷惑をおかけして、申し訳ございませんでした、桐谷さま」

母親が浩次朗にべこべこ頭を下げ、桔梗は彼の腕に自分の腕を絡ませ、ぐっと引く張る。

二人の様に、香月はこのあと激しい折檻が待っていることを確信した。いや、もしかしたら今夜の狩りでは、いつも以上に痛めつけられるのかもしれない。

「浩次朗さま、早く参りましょう！ そんな無能者、慈悲（じひ）をかける必要ありません

わ！ 今日活劇に連れていくのでしたわよね」

「桔梗さん、君の婚約者としてふさわしくない振る舞いだったかもしれないけど、これでおうちが綺麗になったのだから、いいでしょう？ 今日の演目は、桔梗さんが観たいとおっしゃっていた俳優が主演のものですよ。活劇のあとは、カフェーへ参りましょう」

浩次朗が計画を語ると、桔梗は目をきらきらとさせた。

「まあ、嬉しい！ ぜひあの俳優さんの演技を見てみたかったです！」

「はは、では行きましょうか。遅くならない時間に送り届けますので」

最後は母親に言って、浩次朗は会釈と共に玄関から出ていった。母親は二人を笑顔で送り出したあと、香月の頬を張る。

「無能のくせにあばずれの才まであるのですか！ 本当にお前は役に立たないどころか色々な迷惑をかけるわね！」

「申し訳……、ございません……」

「いいですか！ 桐谷さまはお前なぞが目を含わせることは叶わないお方なのでからね！ 桔梗の結婚の邪魔をしようとしたら、首を斬って妖魔たちの中に放り込んでやる！」

最後に臍（すね）を蹴り飛ばして、母親は家の奥に消えていった。

夜、帝都に静寂が訪れる。静まりかえった街の中を、香月は懸命にひた走っていた。黒くて巨大な異形に追われながら。

「お父さま！ お姉さまの方に行ったわ！」

袂を翻し、行燈袴の桔梗が月夜に輝く剣を持って街中を駆けながら、斜め後ろを行く父親にそう叫んだ。

「よし、香月ごと追い詰めろ！ 一匹たりとも逃すんじゃない！」

「はい！」

「今宵は神渡りの日。邪魔の欠片ひとつも残すことは許されない！ おい、香月にもっと血を流させるんだ！ 妖魔が散り散りになっては困る！」

劍柄を握りなおす父親の後ろで、走る母親が手に持つ鞭を振るう。鞭はしなやかに伸び、その長さをぐんと長くして先を行く香月の腕に傷をつけた。

傷口からは赤黒い血がにじみ、うつすらとその周りが黒いもやで覆われる。

夫と桔梗が香月を追うのに続きながら、母親は憎々しげに唸る。

「ああ、忌々しい娘だこと！ いっそ斬り捨ててしまえたらいいのに、それも叶わないって！」

彼女も鞭を握りなおし、香月が走っていった方角へ足を進めていく。向かう先には、

武器を持たない香月が黒き異形のもの——妖魔たち——に追いかけている。

今宵は二十年に一度の特別な満月の日。普段より妖気の濃い街中は、それを知るため、人影もない。

道に響く草履の駆ける音は、どんどん狭い路地へと向かっていく。十字路で直角に進路を変え、また誰もいない通りを走ろうとした、その瞬間。

「きゃあ！ よ、妖魔……！」

ひとりの通行人と行き当たった。

香月の背後に妖魔を見た女性が、その禍々しい様子に腰を抜かす。

なぜ、こんなに妖気の濃い日の夜に、家から出ているのか。しかし、そんなことを質している余裕はなかった。妖魔が香月の頭上を越え、女性に襲いかかろうとする。

「危ない！」

咄嗟に香月はできる限りの力を込めて跳躍をし、女性と妖魔の間に割り入った。ザシュ、と着物の背中が裂け、皮膚の焼ける痛みが髄を走る。

「う……っ」

ジュウウ、と皮膚が焦げる音がする。

己の背中を斬った妖魔の姿が崩れていく中、香月はその傷を辿り、にじんだ自分の血を妖魔たちに向かって投げた。



妖魔たちが我先にとそれに群がる。ジクジクと痛む背中にしかし構わず、女性の腕の下に自らの体を差し入れ、へたり込んだ彼女を立たせた。

「家の中に入ってください。妖気の満ちるところにいてはいけません」

「あ……、ありがとうございます」

ほっとした様子の女性が、香月に体を支えられたが故に、背の傷に気がついた。傷からは小さな黒いもやが立ち、黒く焼けただれた痕のようになっていた。

女性が、慄然とする。

「ひ……っ、黒い血……！」

女性の言葉どおり、香月の背中の傷からは黒い血がにじんでいた。

これが香月を虐げられる身へと転落させた所以の黒の血だ。女性の香月を見る目が、恐怖に変わる。

「『蓮平の忌み子』……！」

この街で知らない者は誰ひとりいない、香月の異名。これが妖魔の血を持つ者、忌まわしき呪われた娘として香月に向けられる、忌避の視線だった。

本物の黒い血にさらに腰を抜かした女性が、地を這うようにして自分の家に戻っていく。さんざん慣れたその様目に、今夜もまた心を閉じる。

（でも、だから役に立っていられるもの……。妖の血を欲して、妖魔が私に群がれば、

お父さまたちは妖魔を狩りやすい……）

女性が香月におのく様子を見ていた母親が、わめき叫ぶ。

「ああ、恐ろしい！ 黒の血だなんて、私は妖魔を生んだというの!？」

母親が金切り声で叫ぶ間にも、えぐれて痛む背中の血のにおいに妖魔が間を詰めてくる。

香月を追い詰めた妖魔たちの目はギラギラと獺猛に光っていて、口から覗く鋭い牙は今まさに彼女を喰らわんとしている。

黒の血に引き寄せられている妖魔を見て、鬼の形相で香月を射抜く母親に、桔梗が口許をほころばせた。

「あら、お母さま。であれば、奴らと一緒に始末してしまえばいいのでは？ 私も逃げるしか能のないお姉さまに、ほとほと呆れていたの」

それを聞いた父親が、ふと気づいたような表情になる。

「そうか、今日は神渡りの日。であれば、桔梗が黒神さまの神力を得て、二十年前の私のように一閃で妖魔を一掃できる力を持てば、もう餌のあいっはいらな……」

「そうなのです、お父さま。私のこの剣で奴らの首と言わず胴と言わず、全てを斬り刻んでしまえば、……いいえ、神さまのご加護をいただけば、妖気すらも滅することができるでしょう。そうなれば、街は常を守られ、お姉さまのいる意味は微塵もなくな



ります」

にこりと純粹な笑顔を見せ、桔梗が言う。父親は頷いた。

「では、お前が斬りなさい、桔梗。私たちの刃では、あいつの妖気に負けてしまう」

「はい、お父さま」

桔梗は優雅に剣を構えると、美しいかんばせに妖艶な笑みを浮かべた。

「お姉さま！ 現代の神渡りのために、その汚らわしい体ごと、この刃の露となって消えてくださいな！」

言うや否や、ブーツの足を一步前に出し弾みをつけて跳躍すると、香月に群がろうとしていた妖魔たちのためにためらいもなく剣を振り下ろした。

『ギィギャアアアアア！』

金属が軋むような叫び声をあげて、妖魔たちが桔梗の破妖刀の餌食となり、黒いもやとなって消える。

もやが消えたあとには、今度こそ背をばったり斬られた香月が横たわっていた。妖魔の爪で斬られたよりも深い傷に、黒と赤の血が混じってその場にじんんでいる。

「あら、お姉さま。人間の血も、お持ちだったのね。でも黒の血を持つ娘なんて、蓮平にはいらぬの。お姉さまがおびき寄せてくださったおかげで、今夜の妖魔は一掃できました。最期のお役目、ありがとう」

ひゅつと血のりを払うと刀を鞘に納め、桔梗はすでに帰路にこうとしていた両親をゆつくりと追う。

「刃が毀れて、骨も斬れませんでした」

「仕方ない。今夜のお渡りで神力を込めてもらおう。我々の刀も随分古びた。……次の二十年分、いやそれ以上に新しくしてもらわねば。お前は蓮平随一の破妖刀の遣い手。黒神さまが力を込めてくださるその剣で、浩次朗さまとともに蓮平を盛り立ててくれ」

浩次朗と婚約中の桔梗は、自分がより彼にとって益のある婚約者となるために、今夜の神渡りでぜひとも強大な力を得たい考えだった。

そういう意味では、姉が餌として逃げ惑うだけでなく、街の人を庇い背中に傷を受けたことは、今日この夜に街にうごめく妖魔を一気に引きつけるのに有効に働いた。

「存分に働いてくださったこと、感謝もしなければいけませんわね。蓮平のあとは、任せてくださればいいわ」

満足げに笑む桔梗たちが去り、あたりは静かな闇に包まれる。

天の満月が輝きを増した。

きらきらと、光の粒がこぼれる。

月明かりが、金の粒子をまき散らす。  
金の灯りが夜空を伸びて地上まで帯を作り、香月をやさしく包み込む。  
サク、と道を踏みしめる草履の音がすると、濃い闇は淡く消え去り、その場に光があふれた。

地面を踏みしめた草履の主は、道に横たわる香月に気づき、彼女の傍に寄る。

「むごいことを……。この傷は妖魔のものではないな。一体、誰にやられたというのだ」

柳眉をひそめ、香月の背中の傷を見たその人物は、ふと背に浮く血の色に目を留める。

「この者は……」

\*

蓮平の一家は、二十年に一度の神の降臨を、御座所おましじろの一角である神の間・神宮じんぐうにて神官と巫女みこに見守られながら、今か今かと待ち構えていた。

桔梗たちが座る広間の正面には七尺を超える鏡がしつらえられており、その上部には紙垂しでが括くくられている。

鏡の前には刀掛けに載せられた破妖刀が置かれ、神降臨の際に神力を分けてもらう準備はすでに万全だった。

やがて巫女の鳴らす鈴の音に乗って、その鏡からあふれんばかりの光がこぼれ始め、淡い金色の光が部屋に満ちると、ひとりの男が音もなくその場に現れた。

男は腰まである艶やかな黒の髪を緩く束ね、なだらかな曲線を持つ闇色の瞳をたたえている。頬骨から顎にかけて余分な肉はなく、薄い唇は少し引き結ばれていて厳かな面持ちだ。

黒檀のごとく深い黒の着物に同色の羽織を身に着けた体軀たいくは、ほどよく筋がついている。彼は、すらりと背を伸ばして、平伏する桔梗たちを一瞥した。

現れた男に、父親は顔を伏せたまま恭うやうやしく申し述べる。

「黒神さま。我ら蓮平、二十年のお務めを果たし、今ひとたびお力となるべく、今代はこの者にお力をいただきたい」

額を床にこすりつけたままの父親の言葉に、桔梗が面おもてを上げぬまま男——黒神——の前へ膝行しんこうでにじり寄った。

刀掛けから手に捧げ持ち、神に差し出すのは、刃の毀れたひと振りの破妖刀。さきほど香月を斬った刀である。

黒神はその刃をじつと見つめた。

「お前がこの娘を斬ったのか」

抑揚のない静かな声が、床に落ちる。

え、と、桔梗が顔を上げる。視線の先には冷ややかに自分を見下ろす主たる神と、彼の腕に抱かれてこちらを見つめる香月がいた。

「お、お姉さま……!」

桔梗の声に、平伏していた父親も顔を上げ、驚愕した。

「香月……! 桔梗、お前、手心を加えたのか!」

「そんなわけありません! 確かに始末したはずなのに……。じゃあ、やつぱり刀が古かったのがいけなかったの……!」

父親も桔梗も、確かに斬って捨てたはずの香月を見て、驚いている。神官がぴくりと片眉を上げたが、彼らは気づかない。

桔梗たちの騒ぎに、黒神は冷ややかな面持ちのまま、蔑視の視線を向けた。

「お前たちは街の者、国の民を守るためにいるのではないのか。その責を果たさず、よくもまあ図々しく我が力を欲したものだな」

部屋の空気が凍るような冷ややかさで、黒神は言った。父親が震えあがりながら、しかしさらに申し述べる。

「お……、お言葉ですが、黒神さま。その者は人のなりをした妖魔。黒い血を流すな

ど、人ではありませぬ……!」

父親の言葉に、母親も我に返る。

「そうです、黒神さま! その娘が街に妖魔を引き寄せているのです! 黒神さまのお力で、その者を消していただけませんでしょうか!」

「姉はあなたさまの手足にもなれない無能者だったのです! 街に混乱を招く、忌むべき姉です!」

母親も桔梗も黒神を前に香月の存在を認めたがらず、これを好機とばかりに彼女の排除を陳情する。

ひたすら家族の役に立とうと自らを餌にしてきた香月は、自分はこうまでも疎まれていたのかと悲しみを深くし、彼らから目を背けた。……彼女を抱いている黒神の腕に、力がこもる。

「お前たちは、この娘が持つ力を見定めずに己が刃を向けた。その行い、浅はかにもほどがある。この娘は我が希望。我が救し。本日現今より、娘は俺の住まう神世にて預かる。俺が完全たりえた暁には、お前たちの力など微塵も欲しない」

そう告げて、黒神は香月を抱いたまま桔梗たちに背を向けた。その背に桔梗が追いつがる。

「黒神さま! 私たちをお見捨てになるのですか!? 蓮平家に生まれ落ちて十五年、

来る日も来る日も黒神さまの手足となって働いてきましたものを……！」  
 桔梗が黒神の着物の袂を握ったが、彼はそれをにべもなく払いのける。

「触れるな。下衆が」

静かな怒気を露わにすると、黒いもやが黒神の周りに湧き立った。

「ひっ！」

本能的な恐怖に、桔梗が手を引く。

じわり、と、妖魔に触れたときのような皮膚の焼ける痛みが走った。やけどを負うほどではないが、じりじりとした熱のくすぶる感覚が指の先に残る。

黒神はもはや桔梗たちを振り返らず、鏡に向き直り、あふれる光の中に消えた。

桔梗は自分の指先と、鏡の中に消えていった黒神を見比べて、戦慄く唇をぎゅつと噛んだ。

「お父さま……」

二人が消えた鏡を見つめたまま、桔梗は自身の抱いた疑問を言葉に載せる。

「お父さま……。あの方は一体……？」

眩き、振り返ると、父親が憎悪を露わにした顔で、二人の消えた鏡を凝視していた。  
 「堕ち神めが……。私たちの邪魔などさせぬ……！」

神官が難しい顔をして目を閉じた。

\*

遡って半時ほど。香月は身の内にあたたかな温度を感じて目を開けた。

「気がついたか」

低く平坦な声は、眼前の美貌の主が発していた。

闇色の瞳は深く香月を見ており、その美しい曲線を縁取るまつげは長い。

雄々しい印象ではないが、視線だけで相手を威圧できるその瞳がやわらかく笑んだら、きっと月の光のごとくやさしい微笑みであるだろうと思わせる顔つきだった。

声には香月を嫌悪する色などは見られなかったが、何ぶんあまりにも距離が近かったため、一瞬驚いて身を固くする。

すると青年は本当に小さく、怖いか、とどこか憂いを含んだ声で香月に問うた。

香月は彼の問いで、自分を抱き起こし介抱してくれたらしき人物に失礼なことをしたと知る。しかし、決して恐れから来るものではないと伝えたくて、口を開く。

「……いいえ、そのようなことは……」

香月は家族からも街の人からも見放されていた。常にその身を妖魔に差し出すことを求められてきて、自分の感情に配慮されることなどは一度もなかった。

そんな境遇であつたから、自分を案じる主が不思議でならない。

「あの……、あなたさまは……」

失礼を重ねないように問うと、青年は、怪我をしていたので応急処置をした、と答えた。

怪我、と聞いて、香月は自身の身に起こったことを思い出す。

そういえば青年が言つたとおり、確かに背中に負つたはずの刃傷の痛みを感じない。  
(癒してくださつたの……？ 薬師さまかしら……)

しかし、思い浮かんだ疑問より、命の恩人に対する礼儀を、香月は優先した。青年の腕から身を起こし、その場で深々と頭を下げる。

傷んだ髪が肩から滑るのと同時に、するりと墨色の羽織が肩から落ちそうになった。香月のものではないから、おそらく青年が背の傷を隠すために貸してくれたのだろう。やさしい人だ。

「どこのどなたか存じませんが、助けてくださり、ありがとうございます。しかし今宵は二十年に一度の満月の夜です。妖魔がこれ以上湧かぬうちに、ご自宅へ戻られた方がよろしいかと存じます」

香月の記憶が正しければ、自分が斬られたときにこの地区にはびこっていた妖魔は桔梗が全て斬つたはずだ。しかしいつまた湧くか分からない。

もし今、妖魔が現れてしまった場合、破妖の力のない自分には、彼を助ける術がない。そう危惧して青年に言うのと、彼は香月を検分するように目を細めた。

「自分の身の心配もそこそこに、他人を気遣う余裕があるのか？ 君は？ 俺が妖の者だつたらどうする。今はまさに君が言つた、二十年に一度の満月……、つまり、妖の者が二十年で一番活発に動くときだろうに」

夜空のごとく深い闇の瞳で香月を射抜く青年は、しかし妖魔のような物騒な気配を持つていない。香月だから分かる、相手が自分の血を欲しているのかどうか、という。そういう気配は皆無だった。

だから青年に対してにこりと微笑むことができた。

「はい。……あなたさまは妖魔ではない、と、私の身の内が断言しておりますので」すると、その言葉に彼はやや納得した様子で、再び目を細めた。

「そう……、そうだろうな。君が持つそれは、確かにそう言うだろう。……おもしろい。ならば、俺と組まないか」

唐突な話向きに、香月はぱちりと目を瞬かせた。

「組む……？」

「そうだ。傷を治すときに分かつたが、背中のあるあちこちに妖魔による傷痕があるな。おそらく傷痕は、背中だけではないのだろうか？ そして今日のようなことも、一度だ

けではないのだらうと推察した。であれば、俺は君をその境遇から救ってやる。かわりに、俺のために力を貸してほしい」

「力……、とは……」

香月の体は、妖魔に好まれる。そんな体が誰かの得になるはずもなく、使い道といたら家族のように妖魔を集めて斬ること以外に考えられない。

「……あなたさまは、五家の方ですか？」

問うたが、はて、と考える。五家の系譜は守る地域がそれぞれ定められており、他家の守備範囲に干渉しない決まりだ。

しかし、蓮平に縁がある者の中に青年のようなりの人はいなかったはず。香月の疑問顔に、青年はみたび、目を細めた。

「まずは契約だ。そのために、君に印をつける。これを用いて俺の力となしてほしい。俺のことはおいおい分かるだろう」

彼はそう言って左手で香月の右手を恭しく取り、右手を香月の手のひらの上にかざした。

「……っ!？」

瞬間、身の内でも熱く滾る何かが体中を駆け巡った。感覚が鋭敏になり、彼が右手をかざした手のひらが燃えるように熱くなる。

何かが、鼓膜を撫でている。

声なのか、音なのか、それははっきりしなかった。

やがて青年が手を退けると、耳に残った音は消えてなくなる。

香月は当惑しながら、しかし自分の右の手のひらを見た。そこにはうつすらと何かの文様が浮かびあがっていた。見たことのない、漆黒色をした文様だ。

「……これは……?」

「俺のものだという印であると同時に、俺が君の力を借りる入り口にもなる。力を貸してもらうために、君には家族から離れて神世に来てもらうが、人である君の体にはあそこの空気が毒となる。だが、俺が認めた者であれば、神世で暮らすに耐え体質になる。印は俺でなければ使えないが、逆に言えば君が力を貸してくれる限り、俺はこの印を消さない」

まったく香月を見る青年の説明は、しかしある種の残酷さを持っていた。つまり彼も、役に立たなければ家族と同じように自分をいらないと言うのだらう。

だが、契約とやらが成立してしまっている以上、香月に許された道は、ひとつなのである。

「分かりました。あなたさまのおっしゃるとおり、お役に立てるようにいたします」

香月の言葉に、彼は彼女をすくいあげ、横抱きにした。

「っ!？」

「君、名は？」

至近距離で、青年が問う。香月はふたつの意味で動悸を抑えながら答えなければならなかった。ひとつは急な他人との接近。もうひとつは、まるで宝物のように大切そうに扱われたことだった。

「か、香月と申します」

「カヅキ？」

「は……、はい。『香る』『月』と書きます」

蚊の鳴くような声で応じると、青年はやや目を睜り、頷いた。

「俺に縁のある名だな。ますます気に入った。香月、このまま神宮に行くが、君は黙って俺に抱かれていればいい」

言葉としては好意的にも取れるが、その声音が言の葉の印象を裏切っている。彼は否やを許さない冷たい雰囲気で、そう告げた。

結局、誰が相手でも香月に選択の余地がないことは同じなのである。香月には頷くことしかできなかった。

\*

そういう出来事があった、香月は青年——黒神——が自分を連れて家族の前に立つたときも、言葉を発しなかった。

ただ家族からの、始末したはずなのに、という言葉に、自分は本当に彼らにとって疎んじられた存在だったのだ、と心を暗くした。

必死に妖魔の前に身を投じていた日々はなんだったのか。家族の役に立っていたのではなかったのか。そういうむなしさや悲しみが胸の中を埋め尽くしていた。

そんな彼女を黒神はどう思ったのか、家族を一蹴した彼は香月を抱いたまま、鏡からこぼれ落ちる光の粒に包まれた。

眩しさに目を閉じれば、ふう、と風の通り抜ける感触がする。それにつられて目を開けると、目の前には見たこともない風景が広がっていた。

雲一つなく抜けるような明るい空の色。その下には裾野広く、白くそそり立った山が遠方に見え、輝く丸い月をいただいている。

月と言っても香月の知る月の明かりとはまったく異なり、その月は透明な光で地上



を隅々まで広く照らし、彼女たちの姿もくつきりと映している。

また、どこからか微かにりん……、りん……、という鈴に似た音が響いていた。月の透き通るような明かりにその音はとても心が落ち着き、風情がある。

そしてそれらを背景に、黒神と香月の前には荘厳な日本家屋が建っている。

洗濯の合間に仰ぎ見る蓮平の母屋さえ大きく感じていた香月だが、この家はその五倍の広さはあるようだ。他にも小屋があるようで、ここには一体何人の人が暮らしているのだろうかと思う。

さらに家屋を彩るのは、萌黄の庭木や今を盛りとばかりに咲き誇る色とりどりの花々だった。視線を下に移せば、こんこんと水の湧く池があり、天の月を映している。贅をつくした造りだと一目で分かった。

「……、……………」

腕から下ろしてもらった香月がその景色に圧倒されていると、黒神は、どうした、と尋ねた。

「いえ……。穏やかな気持ちで見る月が、初めてだったので……」

香月は妖魔をおびき寄せる餌として蓮平にいた。月のある時間——つまり夜——は、妖魔の前に身を投じる時間であり、とても穏やかな時間とは言いがたい。

しかし、己の体質について理解したところから、それは当たり前だと思っていた。だ

から、恐怖を感じずに見る月、というものを経験したことがなかった。

今まで見てきた景色とあまりにも違うそのさまに、彼女は感嘆の声を上げる。

「穏やかに見る景色とは、こんなにも心を動かされるものですね……。空も月も、緑も花も、池の水も、躊躇<sup>ためら</sup>で跳ねるしずくの一つすらも輝いていて、とても綺麗……」

口許をほころばせ、目を大きく睜<sup>ひら</sup>ってあたりを見ている香月に、黒神は、そうか、と大して関心のない様子で言った。

「これからはここで暮らすのだから、好きなだけ見たらいい。誰も君がすることを邪魔しない」

淡々とした声音は何も温度を感じさせず、その意図を測りかねる。

これからは、と言うが、契約はいつまでなのか。契約が完了したら自分はどうなるのか。自分が裏切った家族のもとへ返されるのか。今度こそ刃の露とされるのか。

だが、まったく何も説明がなかった。

もちろん、契約を持ちかけられたときに、家族から用済みとして斬られていたことで、衝動的に黒神の手を取ってしまった香月にも責はある。

有無を言わせぬ雰囲気抵抗できなかつたという言い分もあるが、しかし青年の、事実を述べるだけの、自分にまつたく興味のない様子に、己のこれからを預けることが正しかったのかと、少し不安になってしまふ。

(この方が、やさしいのか冷たいのか、よく分からない……)

自分を斬り捨てた家族から救ってくれたことには感謝している。

しかしまったく知らない世界に來た香月に関心を払わず、ただ己の前に佇んでいる様子を見ると、家族のもとにいたときは別の懸念が胸をよぎる。

この人のもとで、これから過ごしていけるだろうか、と。

家族が相手だったときは、ただひたすら自分を殺していればよかった。

逆らわず、暴力に耐え、夜は妖魔の前に身を差し出すことで存在の権利を得ていた。一方で、家族は嫌悪、憎悪、といった感情を、香月に向けていた。それは確かに辛い感情だったが、今黒神に向けられた……、いや、向けられてさえもない感情と、どちらがよりよいのだろうか。

(黒神さまは、私が契約を履行すること以外には、価値がないと思われているのかも知らない……)

それは家族が向けてきたものと同質のようで、それ以上に冷たい態度ではないだろうか。今、黒神の目の前に立っていても、彼にとつて香月が無意味であるということだから。

そわり、と、己の足下が崩れるような感覚に陥る。咄嗟に両手を腹の前で合わせてぎゅうっと握った。

(大丈夫……。これから黒神さまのお役に立っていけば、変わるかもしれないじゃない……)

しかし、神という存在が、人間である香月と気持ちを通わせてくれることなどあるのだろうか。自分は蓮平の人間でありながら、あまりにも黒神について何も知らない(でも……、知らないままでいるより、知っていけたら、いいわ……)

彼は家族と違い、香月に感情を持っていないかもしれないが、一方、これからのやりようで、拒絶ではない気持ちを抱いてくれるかもしれない。

彼と、せめて穏便な関係を築くことができれば、黒神との契約を履行しやすいのではないか。少なくとも、香月にとって。

そうと分かれば事は簡単だ。まずは彼の言葉どおりに、ここで与えられた権利を得るための対価を理解しなくてはいけない。

香月は背をしゃんと伸ばし、黒神に改めて向き直った。

「神世で、私は何をしたらよいのでしょうか」

恐れていたよりもはつきりと、問うことができた。黒神はゆるりと香月に視線を合わせる。しかしそのとき、屋敷から人が出てきた。

「おかえりなさいませ、玄侑さま！」

「お疲れさまです、玄侑さま。無事に神力の付与はできましたか？ ……おや、そち

らの方は？」

黒神を出迎えに来たのは、<sup>よわい</sup>齡十歳ほどの外見の少女と、二十四、五歳の青年だった。少女は栗鼠<sup>りす</sup>のように頬をきゅっと上げた表情で駆けてくるから、肩までの美しい濡羽色の髪が揺れている。

青年の方は切れ長で光度のない黒色硝子のような瞳が特徴的な、面長の大人びた様子の人だ。少女とは対称的に、落ち着いた表情でこちらにゆったりと歩んでくる。

彼らの言から、黒神が『玄侑』という名であることが分かった。黒神——玄侑——は、彼らに対してにこりともせずに、儀式はしなかった、とだけ応えた。

「鷹宵<sup>おしよ</sup>、あとでこの娘に屋敷を案内してやってくれ。夜斗<sup>やと</sup>、香月の着替えを」

鷹宵と呼ばれた青年は、夜斗に香月を任せてその場から去ろうとする玄侑の背中に問うた。

「蓮平は儀式をせずで大丈夫なのですか？」

「蓮平は今夜の分を一掃した。今後も狩りきれないほどではないだろう。この間に香月から力を得て、万事まとめる」

やはりなんの温度も乗せない玄侑の言葉に冷たい印象を持つ。

桔梗は神渡りを前に大量の妖魔を一掃できたほどだから、彼の言葉どおり、まだ刀の力は残っているのだろう。

しかし一方で、家族は玄侑の力を頼みに破妖の仕事をしている。神である玄侑は彼らの望みに応えていないのだ。

（玄侑さまはやはり冷たいお方なのかもしれない……）

桔梗たちが力を賜<sup>たま</sup>われなかったのは、玄侑が欲したらしい香月を害したが故。罰と言えば罰であり、容赦ない裁きに畏怖の念でふるりと震える。

今の彼女らは、未来の自分であるかもしれないからだ。

（これが、神というお方……）

神とは人に願われ請<sup>こ</sup>われる者。人に恵みを与え、教えを説く者。教えに背<sup>そむ</sup>けば罰を下し、人を導く者だから。

さきほど、玄侑が自らになんの感情も向けていないと思った理由を、香月は神としての在り方に見いだした。

しかし一方で、彼はまだ自分を厭<sup>いと</sup>っていない。その事実だけでも玄侑に尽くすことができる、と思う。

いや、尽くさなければならぬ。だって、そういう契約なのだから。

背をピリリとした緊張感が走ったとき、夜斗と呼ばれた少女が笑みをたたえて、香月を屋敷の中へ促した。

「香月さま、どうぞこちらへ」

そう言われて玄閼をくぐる。

磨き抜かれた廊下を彼女に案内されて進めば、いくつもの襖を通り越した先にある部屋に通された。部屋は衣草のいい香りがし、飾り気はないがこの屋敷の主……、つまり玄侑の好みを表しているようにも思えた。

夜斗は部屋にしつらえられている桐の箆笥から着物を出して、畳の上に並べ始める。「玄侑さまのお色でもありますので、黒の着物しかございませんが、どれもよい品でございます」

並べられた品々は、なるほどどれも正絹の手触りのよさそうな着物で、夜斗の手によってどんなに並べられていく。

柄は控えめなものが多くだろうか。桔梗が着ていたような洋風の大柄な着物はなく、古くから親しまれてきたやさしい柄ばかりだ。

だが、それがいい、と思う。自分は桔梗のように華やかな相貌ではないし、そもそも傷んだ紺の緋をずっと着ている。袖口がすり切れてなかったりするだけでもありがたいのに、並べられた着物は傍目に見ても分かるほど上等なものだ。

ぼうつと見惚れていると夜斗が、お気に召す着物がありますか？ と笑みを絶やさず問うてきた。

「え……つと……」

選択権を与えられたのは初めてである。

玄侑が香月に契約を持ちかけてきたときだって、彼は否を待つ雰囲気ではなかった。それ以前の生活に至っては、言うまでもない。

夜斗が香月の顔を、じつと見つめている。期待をはらんだ目だ。どれを選ぶことが彼女にとってよいのだろうか。考えに考えた挙句、弱々しく口を開く。

「え……、選べません……。どれも、私には過ぎるお品です……」

この屋敷に仕える使用人がここにいたとして、彼らが着るのと同等の質の着物だったらまだ選べた。

しかし夜斗が並べたのはどれも、彼女が使用人だとしてもその彼女が身に着けているものよりも上等だ。おそらく玄侑が身に着けているものにも匹敵する。彼に拾ってこられたばかりの香月が、その中から選べるはずがない。

厚意で選ばせてくれようとしている夜斗に申し訳なく思っていると、彼女は、では私が選んでもよろしゅうございますか、と口端をきゅつと上げた。

「夜斗の頭を存分にお使いください。玄侑さまがお連れになった香月さまには、その権利があります」

そう言って、彼女は並べた着物を端から香月に当てていった。

桜花文、乱菊、唐花と様々な色柄が体を覆っては外されていく。